

三重大医学部の解剖実習室。黙とうを終えた三年生百二十人余りに、大河原剛さんは話し始めた。

「ここでは、教師は私たちではありません。献体されたご遺体です。医学の発展に貢献したいと提供して

をする。正規の時間では間に合わず、日暮れまで実習室に残る班もある。

人体は千差万別。皮下脂肪の中を走る血管や神経も教科書通りにはいかない。血管の名前などで学生から確認を求められても、すぐに答えを教えず「どうして



くださったご本人、ご遺族の思いをよく理解して、礼を失しないように」

「実習を通じて、大きく変わる学生が多いです。知識だけでなく、医師としての心構えを得る意味でも重要だと思っています」

三十一の台に、献体された遺体が並ぶ。四人一組の班で、三時間半の実習を、四月から週に四こまずつ二カ月半かけて、一体の解剖

三重大大学院 (津市)

講師 おおかわら 大河原 剛さん (40)



実習室で、解剖による学びの大切さを語る大河原剛さん

ももとは生物工学の神経系の研究者。群馬県出身で中学時代、アルツハイマー型の認知症が進行する祖父の姿にいたたまれない思いになり、脳神経の仕組みに関心を持って東京理科大

藤田保健衛生大を経て、二〇一〇年に三重大へ。脳や発達障害のメカニズムを調べる成田正明教授の教室で解剖学を担当しつつ、研究生活を続けている。近く日本の学会の研究誌

生物工学科に進んだ。四年のときに配属された研究室も神経系。同大学院の修士課程で研究を続け、愛知県岡崎市の基礎生物学研究所で学位を得。信州大、に、妊娠中のウイルス感染がセロトニン神経系に与える影響について、論文を載せる。妊娠中に風疹やインフルエンザにかかり、同神経系の発達異常につながる、自閉症や乳幼児突然死症候群と関係するのではないかと、モデルラットを使った研究だ。「まだ調べることが山ほどありますが、もし事実なら、ウイルス感染のリスクを訴えることで発症確率を下げられるかも」と情熱を燃やす。

解剖を通し医の心伝える

妻も名古屋大医学部の神経系の研究者。名古屋と津市の中間を取って、三重県四日市市に居を構えた。「妻の方が帰宅が遅くて、僕が夕ご飯の準備をする」とが多いです」と笑った。(編集委員・安藤明夫)